

## 飛島の未来を考える — 関係人口で成り立つ島へ —

庄司 桃音

山形県酒田市飛島では、昭和10年代には人口が1700人を超えていたが、昭和30年代以降、人口減少が急速に進んだ。令和5年末には人口は159人、平均年齢は72歳となり、このままの人口減少が続けば将来は無人島になる可能性さえある。県や市では飛島の活性化のために、長年多くの施策を打ち出しているが、持続可能な島づくりへの道筋はまだ見えていない。

以上を背景に、本論文では現在の飛島の状況を踏まえて、新たな活性化の切り口である「関係人口」による島づくりを提案する。研究の方法は、文献、資料、およびインターネットでの調査と関係者へのインタビューなどによる。

その結果、島という特異な環境が移住・定住の促進を妨げ、容易には人口の増加は見込めないこと、飛島は酒田市の本土側との「二拠点生活が基本」であること、「定住人口」から「関係人口」という新たな視点で活性化を模索する必要があることが明らかになった。

そこで、山形県と酒田市が主催し、合同会社とびしまが運営する「合宿をつくる合宿“島キャンプ”」という関係人口づくりを旨とするプロジェクトに着目した。筆者の島キャンプのコーディネーターとしての経験や関係者の声をもとに、「参加者から関係人口を創出する」ことを目的に島キャンプの改善策を提案し、令和5年8月に実施、検証を行った。

成果として、以前のキャンプでは活性化を意識しすぎて義務感や停滞感が生じることもあったが、今回は参加者全体に「企画を楽しむ」という雰囲気が生み出され、「また飛島に行きたい」という思いにつながっていった。さらには、チーム間、コーディネーター間のコミュニケーションを促進することでキャンプが活性化した。

このように「楽しむ」ことこそが鍵であり、そのプロセスの先に結果として活性化や関係人口が成り立つといえる。「楽しさ」を周りに普及させ、多くの人を巻き込むことで、飛島の持続可能な島づくりが実現することを期待したい。